シンポジウム１

日時：2022 年 6 月 11 日（土）8:30-10:00

【プライマリ・ケアは「住まい」にどこまで踏み込むか？】

＜企画責任者＞　木佐　健悟（JA 北海道厚生連　倶知安厚生病院　総合診療科）

座　　長　　吉江　　悟　　（一般社団法人 Neighborhood Care　代表理事）

座　　長　　春田　淳志　　（慶應義塾大学医学部　医学教育統轄センター）

演　　者　　加藤　忠相　　（株式会社あおいけあ　代表取締役／
株式会社ノビシロ　取締役）

演　　者　　柳澤　優子　　（一般社団法人 Life&Com　代表理事／
在宅看護センターLife&Com　管理者）

演　　者　　漆畑　宗介　　（JA 秋田厚生連　湖東厚生病院　家庭医療専門医）

＜企画概要＞

医療介護総合確保法において地域包括ケアシステムは、医療・介護・介護予防・日常生活支援・住まいという 5 要素を内包するものとして位置付けられています。うち「住まい」については、行政的には施設等の整備量の話に矮小化されてしまうことも多いですが、本来は人的環境とは別に、Compassionate Communities に寄与できる居住環境・地域環境とは何か、という視野を与えてくれる唯一の要素とも捉えられます。居住環境がどうデザインされているかによって、医療職の果たすケアの範囲も大きく変わり得るでしょう。本企画では、住まい・ランドリー・カフェ・ソーシャルワーク・医療といった機能を内包したノビシロハウス（藤沢市）を事例としてとり上げながら、「ソフト（人と人の関係）を自然と進化させてくれるハード（住まい・場）とは？」、「住まい・暮らしとプライマリ・ケアの適切な距離感は？」といったテーマで、ゲストとともにディスカッションしたいと思います。

シンポジウム２

日時：2022 年 6 月 11 日（土）8:30-10:00

【全国の新型コロナウイルス感染後遺症診療体制の充実にむけて

-聖マリアンナ医科大学病院での多職種連携による

治療内容と後遺症診療神奈川モデル-】

＜企画責任者＞　土田　知也（聖マリアンナ医科大学）

司　　会	土田　知也	（聖マリアンナ医科大学）
演　　者	井上　陽子	（聖マリアンナ医科大学総合診療内科）
演　　者	吉岡千恵子	（聖マリアンナ医科大学病院 緩和ケアセンター）
演　　者	中村　晴美	（聖マリアンナ医科大学病院 移植医療支援室）
演　　者	桑島　規夫	（聖マリアンナ医科大学病院 メディカルサポートセンター）
演　　者	村岡　広代	（神奈川県医療危機対策本部室　感染対策グループ）

＜企画概要＞

新型コロナウイルス感染症後遺症とは、感染後 3 か月以内に発症し、2 か月以上症状が持続、その他の疾患を除外したものである。倦怠感や味覚嗅覚障害、認知機能低下など様々な症状がある。日常生活を送ることも困難となり、経済的に困窮する患者もいる。身体症状への治療、精神的なケア、職場復帰支援など様々な対応を必要とするが日本では後遺症診療を行う施設は少ない。神奈川県の 2021 年 11 月の調査では回答があった 1,220 の医療機関の中で専門外来を設けるのは 6 施設のみであり、760 施設は今後も後遺症診療を行う予定はないという回答であった。当院では各診療科、看護師、ソーシャルワーカーを含めた部門が連携し、450 名近くの後遺症患者の診療を行ってきた。本シンポジウムでは後遺症診療を担う総合診療医、看護師、ソーシャルワーカーをシンポジストとして迎え、後遺症診療の課題や今後の解決策に関しての議論を行う。また、神奈川県医療危機対策本部室担当者より行政における罹患後症状に対応した取り組みについて発表頂く。本シンポジウムが全国における後遺症診療体制の充実につながればと思う。

シンポジウム３

日時：2022 年 6 月 11 日（土）8:30-10:00

【患者のエクスペリエンス/ジャーニーを医療の質向上にどう活かすか】

＜企画責任者＞　青木　拓也（東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター
臨床疫学研究部）

座長・演者　青木　拓也　（東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター
臨床疫学研究部）

演　　者　藤井　弘子　（一般社団法人 日本ペイシェント・エクスペリエンス
研究会）

演　　者　小坂鎮太郎　（練馬光が丘病院 総合診療科）

演　　者　栗原　　健　（名古屋大学大学院 医療の質・患者安全学講座）

＜企画概要＞

Patient Experience (PX)という概念をご存知でしょうか？患者のエクスペリエンス（患者がケアプロセスにおいて経験する事象）の評価は、良質な医療を提供する上で不可欠であり、PX は、今や国際的に重要な医療の質指標に位置付けられています。PX は、プライマリ・ケア領域で特に重視される患者中心性の指標であるだけでなく、有効性や患者安全とも深い関係があることが分かっています。また縦断的な PX は、Patient Journey (PJ)と呼ばれ、より柔軟な活用が可能です。本企画では、PX や PJ の意義や評価・活用について、患者と医療者の双方の視点から解説するとともに、プライマリ・ケア領域における患者中心の医療のあり方を探ります。

シンポジウム４

日時：2022 年 6 月 11 日（土）8:30-10:00

【臨床の現場で、僧侶は一体何ができるのか】

＜企画責任者＞　佐藤只空　（広島市立広島市民病院）

司　　会　　佐藤只空　　（広島市立広島市民病院）

演　　者　　三浦紀夫　　（ビハーラ 21）

演　　者　　井川裕覚　　（関東臨床宗教師会）

＜企画概要＞

生物社会心理の枠に含まれない、されど患者さんの生き死にを語る上で重要な宗教やスピリチュアルといった領域。そういった領域を臨床の現場できちんと扱うことの必要性が叫ばれるようになって久しいですが、一方で元々の考え方の違いなどが理由でなかなか既存の医療と宗教の連携にまつわる成功事例がこの日本には少ないのも事実です。 本シンポジウムでは実際に臨床の現場で汗水を垂らしていらっしゃる稀有な僧侶たちから、医療と仏教が連携することの難しさや実際の現場での体験談、僧侶としての患者さんとの向き合い方、そして今後の展望などを忌憚なく伺っていきます。 医療と宗教の連携というまだまだ手探りの面が多い領域ですが、ここから連携が広がるきっかけになれば良いなと考えています。

シンポジウム５

日時：2022 年 6 月 11 日（土）8:30-10:00

【総合診療医のキャリアパス】

＜企画責任者＞　石丸　裕康（関西医科大学総合診療医学講座）

座　　長	石丸　裕康	（関西医科大学総合診療医学）
座　　長	前野　哲博	（筑波大学 医学医療系 地域医療学）
演　　者	横谷　省司	（筑波大学医学医療系 地域総合診療医学）
演　　者	志水　太郎	（獨協医科大学総合診療医学）
演　　者	飯塚　玄明	（聖母病院 総合診療科）
演　　者	小杉　俊介	（飯塚病院 総合診療科）

＜企画概要＞

総合診療専門医が、今後活躍していくためには、基本領域の研修終了後も確かなキャリアを歩んでいくことが重要であり、その一つの手段としてサブスペシャルティ制度がある。本学会が 2020 年より新・家庭医療専門医制度を運営しており、また病院総合診療医学会も 2022 年より、病院総合診療専門医制度を開始するなどその体制が整いつつあり、また両学会で協力・協同していく方針が示されている。しかしながら制度は開始したばかりであり、学生・研修医・専攻医などに十分浸透しきれていない懸念もある。本シンポジウムでは、現在制度構築されている新・家庭医療専門医、病院総合診療専門医の現状、その異同、今後の協力体制などについて示すとともに、総合診療医のキャリアパスについて俯瞰しその展望について議論する。

シンポジウム６

日時：2022 年 6 月 11 日（土）10:15-11:45

【多様なセクシュアリティの人が受診しやすく、

働きやすい医療機関を目指して】

＜企画責任者＞　西村　真紀（川崎セツルメント診療所）

司　　会	西村　真紀	（川崎セツルメント診療所）
司　　会	吉田絵理子	（川崎協同病院　総合診療科）
演　　者	武田　裕子	（順天堂大学大学院医学研究科医学教育学）
演　　者	金　　弘子	（飯塚病院　総合診療科）
演　　者	坂井　雄貴	（一般社団法人にじいろドクターズ・ほっちのロッヂの診療所）

＜企画概要＞

2020 年に開催された第 12 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会では、草場理事長より「イクボス宣言×SOGI アライ宣言」が発表された。この宣言の中には「性的指向/性自認（SOGI）の多様性を尊重する」という文言も含まれている。多様性の尊重が重要であることについては論をまたないが、実際に職場として、医療機関として、具体的な行動に落とし込むことは容易ではないかもしれない。本企画では、SOGI の多様性が尊重される医療機関、職場作りを目指して活躍されている様々な立場の３名の演者を招き、シンポジウム形式でそれぞれの活動について報告していただく。それぞれ実践についての報告だけではなく、どのような困難があったか、どのようにそれらを乗り越えてきたのかも共有いただくことで、これから取り組み始めようとする医療機関や、取り組み始めてみたものの課題があるという医療機関の実践をサポートできる tips を届けたい。

シンポジウム７

日時：2022 年 6 月 11 日（土）10:15-11:45

【アーバンプライマリケアの礎を築くための卒前教育の展望】

＜企画責任者＞　安藤　崇之（慶應義塾大学医学部総合診療教育センター）

座長・演者　　安藤　崇之　（慶應義塾大学医学部総合診療教育センター）

座　　長　　春田　淳志　（慶應義塾大学医学部医学教育統括センター）

演　　者　　八百　壮大　（JCHO 横浜保土ヶ谷中央病院）

演　　者　　高木　　博　（みぞのくちファミリークリニック）

演　　者　　玉井　　瑛　（慶應義塾大学医学部）

＜企画概要＞

都会の高齢化は深刻であり、経済格差や住民の多様化など複雑で潜在的な課題に直面するアーバンプライマリケアの発展には、卒前教育も非常に重要である。慶應義塾大学では 2020 年 1 月より学閥を超えて地域の病院・診療所と連携する総合診療科の臨床実習を開始したが、コロナ禍で院外実習が困難となり、バーチャル臨床実習やオンライン地域診断を取り入れた臨床実習を開発した。13 の医学部がある東京都で多くの学生にプライマリ・ケアを学んでもらうには、限られた実習の場の取り合いではなく、ポストコロナに向けて最適な学習リソースやノウハウを学閥を超えて共有していく必要がある。本シンポジウムでは、コロナ前・コロナ禍の取り組みを大学教員、地域の指導医、医学生の立場から振り返り、ポストコロナの都会における総合診療の卒前教育のあり方や共有可能な学習リソース・ノウハウについてディスカッションを行う。

シンポジウム８

日時：2022 年 6 月 11 日（土）10:15-11:45

【マルチモビディティをバランスよく見るための妄想力を鍛えるカンファレンス

（通称マルモカンファレンス）をやってみよう！】

＜企画責任者＞　大浦　誠（南砺市民病院）

座長・演者	大浦　誠	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	松本謙太郎	（国立病院機構大阪医療センター　総合診療科）
演　　者	大村裕佳子	（金城大学　看護学部）
演　　者	關谷　暁子	（北陸大学　医療保健学部）
演　　者	刑部　正人	（南砺市民病院　循環器内科）
演　　者	城寶　　学	（南砺市民病院　事務）
演　　者	小川　太志	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	武島　健人	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	森腰　夏子	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	宇野　仁美	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	田村　義博	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	竹村舞衣音	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	案浦　　俊	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	伊藤　恭平	（南砺市民病院　総合診療科）
演　　者	小嵐　　優	（南砺市民病院　初期研修医）
演　　者	高畠　　育	（南砺市民病院　初期研修医）
演　　者	小川　風吹	（南砺市民病院　初期研修医）
演　　者	坂東　　裕	（南砺市民病院　初期研修医）
演　　者	平辻　　寛	（南砺市民病院　初期研修医）
演　　者	緒方　理子	（産業医科大医学部医学科 6 年）

演　　者　　筧　みなみ　　（島根大学医学部医学科 6 年）

演　　者　　立浪　郁乃　　（富山大学医学部 6 年）

＜企画概要＞

日々の診療において多疾患併存（マルチモビディティ：以下マルモ）の患者は避けて通れません。複数のプロブレムの中から優先順位をどうつけるのか。不確実な中で患者と意思決定をどのように行うのか。過不足のない介入になるために複数の医師や医療・介護福祉専門職との連携・協働をどのように行うのか。まさに総合力を試されます。本講演では医学書院の週刊医学界新聞で「ケースで学ぶマルチモビディティ」で連載している筆者の病院で総合力を身につけるために実施している「マルチモビディティをバランスよく見るための妄想力を鍛えるカンファレンス（通称マルモカンファレンス）」を実演しながら，マルモのみかたについて学んでいただきます。マルモ診療を知りたい専攻医や医学生，マルモについて勉強してみたい多職種，マルモカンファレンスを導入したい指導医の皆様も是非ご参加ください（どのような職種でも楽しめます）

シンポジウム９

日時：2022 年 6 月 11 日（土）10:15-11:45

【社会的処方の実践：シンガポールと日本のコミュニティホスピタルでの経験を議論する（通訳あり）】

＜企画責任者＞　本田　宜久（頴田病院）

座　　長　　金城謙太郎　　（帝京大学医学部帝京大学救急医学講座総合診療科）

司　　会　　吉田　　伸　　（頴田病院）

演　　者　　近藤　敬太　　（藤田医科大学 総合診療プログラム 豊田地域医療センター）

演　　者　　本田　宜久　　（頴田病院）

演　　者　　Lee Kheng Hock　　（SingHealth Hospital（シンガポール））

演　　者　　Tan Boon Yeow　　（St Luke’s Hospital（シンガポール））

通　　訳　　渡辺　龍二　　（株式会社麻生）

＜企画概要＞

社会的処方の認識は広がっているが日常診療で実践例は多くはない。本セッションでは、シンガポールと日本のコミュニティホスピタルでの事例を紹介し、更なる社会的処方の導入、拡大に貢献できるディスカッションを行う。　シンガポールの SingHealth Hospital では通常の医療的ケアに加え、健康の社会的決定因子をスクリーニング、アセスメントし、退院患者を地域コミュニティに紹介している。新型コロナ禍での新しいアプローチとして、コミュニティにつながるモバイルテクノロジーを患者に教える“E-Social Prescribing”を実践している。St Luke’s Hospital では全入院患者に健康の社会的決定因子のアセスメントを行い、パストラルケアカウンセラーが臨床チームと共に心理感情面の課題を見出し解決の支援をしている。　日本からは頴田病院での就労支援の仕組みや住民のニーズ調査から発展した買い物体験支援について紹介する。また、豊田地域医療センターでは山間地域にて隣人が住民の健康阻害因子を早期発見し介護、医療依存度の上昇を防ぐ取り組みを紹介する。　なお、シンガポールからも演者が来日予定だが感染状況によってはオンラインや収録動画での参加も考慮する。通訳を演者側で用意するため日本語での参加で全く支障はない。

シンポジウム１０

日時：2022 年 6 月 11 日（土）10:15-11:45

【シン・家庭医療専門医の目指すべきメンタルヘルス教育～委員会からの提言】

＜企画責任者＞　家　研也（聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院）

司　　会　　家　　研也　　（聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院）

司　　会　　若林　英樹　　（三重大学医学部附属病院 総合診療科）

演　　者　　河田　祥吾　　（亀田ファミリークリニック館山）

演　　者　　家　　研也　　（聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院）

パネリスト　　新野　青那　（福井大学大学院地域総合医療学コース）

パネリスト　　新野　保路　（福井大学医学部附属病院総合診療部/
南越前町国民健康保険今庄診療所）

パネリスト　　田中　道徳　（岡山家庭医療センター）

パネリスト　　今村　弥生　（杏林大学医学部附属病院 精神神経科）

アドバイザー　岡田　唯男　（鉄蕉会　亀田ファミリークリニック館山）

アドバイザー　近藤　　洋　（Providence St. Peter Family Medicine
Residency Progam）

クロージング　横谷　省治（筑波大学医学医療系寄附講座地域総合診療医学）
　リマークス

クロージング　喜瀬　守人（医療福祉生協連課程医療学開発センター／久地診療所）
　リマークス

＜企画概要＞

2019 年の WONCA による当学会研修プログラムの国際認証評価において「メンタルヘルス教育の充実」が喫緊の課題として指摘されています。 これを受け、2020 年よりメンタルヘルス委員会が新設され、国内外の総合診療におけるメンタルヘルス教育の現状・課題調査と、その結果を受けた研修カリキュラム提言作成に取り組んできました。 本シンポジウムではまず「総合診療におけるメンタルヘルス教育」の国内外調査結果を要約してお届けします。 そのうえで、総

合診療医、精神科医、公認心理師、医学教育専門家など、多分野のパネリストの視点から「効果的なメンタルヘルス教育」に必要なことと今後の展望を論じます。 「シン・家庭医療専門医」を名実ともに国際標準とするための研修目標と方略、さらに学会員のメンタルヘルス生涯教育の展望について、委員会の提言をお届けします。 総合診療専門研修、新・家庭医療専門研修に関わりや関心がある方、メンタルヘルスに関する生涯教育に関心のある全ての方が対象です。

シンポジウム１１

日時：2022 年 6 月 11 日（土）14:45-16:15

【「見えにくい」都市のプライマリ・ケアを「見えやすく」】

＜企画責任者＞　密山　要用（王子生協病院、東京大学医学教育国際研究センター
医学教育学部門医学教育学部門）

座　　長	密山　要用	（王子生協病院、東京大学医学教育国際研究センター 医学教育学部門医学教育学部門）
座　　長	金子　　惇	（横浜市立大学大学院　データサイエンス研究科 ヘルスデータサイエンス専攻）
演　　者	八百　壮大	（JCHO 横浜保土ヶ谷中央病院　総合診療科）
演　　者	佐野　康太	（王子生協病院）
コメンテーター	藤沼　康樹	（医療福祉生協連 家庭医療学開発センター長 生協浮間診療所）

＜企画概要＞

世界的な都市化と人口集中が進んでいるが、都市のプライマリ・ケアについては、地方やへき地と比較して、潜在的な対象集団は大きいにも関わらず十分に検討されてこなかった。また疫学的観点から語られることが多く、臨床実践の観点からの知見や発信は限定的であった。 本シンポジウムでは、これまで「見えにく」かった都市のプライマリ・ケアについて、いくつかの「地図」と「道具」を提示して「見えやすく」することで、現場の実践家たちが自信を持って取り組み、知見を発信、共有できる基盤となる場を提供したい。 そのためにまずはプライマリ・ケアの学術的・歴史的文脈において位置付ける「地図」を示し、都市版コンピテンシーや日本版へき地尺度などの「道具」を提示する。そして、２つの異なる都市で実践に取り組むケアチームから事例を提示してもらい、都市のプライマリ・ケアらしさと臨床実践のポイントを読み解く。最後に今後の本領域の展望と課題について全体で議論したい。

シンポジウム１２

日時：2022 年 6 月 11 日（土）14:45-16:15

【家族志向ケアの教育について考える

～全国のグッドプラクティスから学ぶ～】

＜企画責任者＞　宮本　侑達（ひまわりクリニック）

座　　長　　若林　英樹　　（三重大学亀山地域医療学講座 寄附講座）

座　　長　　宮本　侑達　　（ひまわりクリニック）

コメンテーター　　松下　　明　　（岡山家庭医療センター）

演　　者　　山田　宇以　　（聖路加国際病院心療内科）

演　　者　　田中　道徳　　（岡山家庭医療センター）

演　　者　　内堀　善有　　（名張市立病院総合診療科）

演　　者　　永嶋有希子　　（滋賀家庭医療学センター）

＜企画概要＞

家族志向ケアは総合診療専門医・新家庭医療専門医の研修中の獲得すべき能力として明示され、提出するポートフォリオの項目としても挙げられている。プライマリ・ケアの現場でも家族の問題は扱う頻度は多く、家族の存在や関係性は事例の複雑さを決定する大きな要因ともいえ、現場における家族の存在は大きい。しかし、家族志向ケアの指導に関しては、困難を抱えている指導者・プログラムが多いのも現状と考えられる。特に、日本では理論や方法論は書籍やセミナーなどで学ぶことはできても、現場の実症例への応用については学習する場はほとんど存在しない。 家族志向ケアをどのように指導すれば良いのか、プログラムの中でどのように教育実践すれば良いのか、そしてその課題は何か。本シンポジウムでは、全国の状況も踏まえ、国内で実地やオンライン指導でグッドプラクティスを行う先生方にご登壇いただき、実践例の共有や議論を行いこれらを深めていきたい。

シンポジウム１３

日時：2022 年 6 月 11 日（土）14:45-16:15

【事例の複雑さを多職種で紐解くカンファレンスをライブする　Day1】

＜企画責任者＞　春田　淳志（慶應義塾大学）

司　　会　　春田　淳志　　（慶應義塾大学）

ファシリテーター　　後藤　亮平　　（筑波大学）

＜企画概要＞

複雑な事例は多様であり、画一的な解決策はない。多職種の眼前にある課題は、個別の経済社会的要因や歴史、トラウマなど過去の潜在的要因が複雑に影響している。これらの情報を包括的に収集するには、人間関係や職種の専門性の組み合わせが影響するため、標準化できない。そして、患者や家族とのかかわりで見えてくる目の前の課題と多職種たちが抱える問題をどのように捉え、分析、統合するかは多職種との情報のやり取りにかかってくるが、このやり取りも規格化できない。そこで、本セッションでは事例の複雑さを全国の有志の多職種で紐解くカンファレンスをライブで発信し、そのリアルを共有する。Day1 は課題の見立てや仮説を共有し、Day2 に続ける。

シンポジウム１４

日時：2022 年 6 月 11 日（土）16:30-18:00

【「社会的処方」におけるプライマリ・ケアの役割および課題】

＜企画責任者＞　長谷田真帆（京都大学）

座　　長	長谷田真帆	（京都大学）
座　　長	長嶺由衣子	（東京医科歯科大学東京都地域医療政策学講座）
演　　者	西岡　大輔	（大阪医科薬科大学）
演　　者	藤沼　康樹	（医療福祉生協連家庭医療学開発センター）
演　　者	水谷　祐哉	（いなべ暮らしの保健室）
演　　者	平松　佑介	（小杉湯三代目）
演　　者	西出　真悟	（オレンジホームケアクリニック）

＜企画概要＞

健康の社会的決定要因（SDH）への対応の一つとして、昨今「社会的処方」という概念に注目が集まっており、2020 年の骨太方針にもその文言が盛り込まれた。しかし現時点では、具体的な「処方」の在り方は各現場に任されている。またその用語そのものや、地域におけるソーシャルワークおよび多職種協働などの近接領域との関連性には議論があり、特に制度化には慎重であるべきという声が少なくない。このような中、プライマリ・ケア従事者は地域の中で、どのような立ち位置および姿勢で今後「社会的処方」あるいは類似の地域活動に携わるべきであろうか。 本シンポジウムでは、まず社会的処方の概念、利点および懸念点を整理する。また、地域でのつなぎ役や住民とともに行っている活動と、それぞれの立場からの所感を紹介する。その後プライマリ・ケアが「社会的処方」において果たすべき役割および課題について議論し、今後の方向性を模索する。

シンポジウム１５

日時：2022 年 6 月 11 日（土）16:30-18:00

【プライマリ・ケアにおける Quality Improvement】

＜企画責任者＞　小林　美亜（山梨大学大学院総合研究部医学域）

座長・演者　小林　美亜　（山梨大学大学院総合研究部医学域）

演　　者　尾藤　誠司　（国立病院機構 東京医療センター）

演　　者　松村　真司　（松村医院　国立病院機構 東京医療センター臨床疫学教室）

＜企画概要＞

日本プライマリ・ケア連合学会が認定する新家庭医療専門医の到達目標の一つに「診療の質、患者安全など、診療組織内のシステムの課題を分析し、その課題に対して体系的、持続的な改善方法を実施し、評価できる」ことが明記されている。現在、日本では、市民がかかりつけ医を持つことのメリットを十分に理解できていない現状がある。市民がかかりつけ医を重要な存在として認識し、安心して活用していくための一つとして、プライマリ・ケアの質に係る情報を可視化し、説明責任を果たし、質評価・改善を通じて、良質な医療提供体制を構築していくことが求められる。実際に、OECD の HCQI プロジェクトでは、国際的に比較可能でかつ有効なプライマリ・ケアの質と安全性に関する指標を開発し、質の向上策の検討に役立て、情報を発信している。本シンポジウムでは、国内外のプライマリ・ケアの質評価や実際の取組を通じて、これから求められる質向上の方策を検討する。

シンポジウム１６

日時：2022 年 6 月 11 日（土）16:30-18:00

【やってみよう！はじめての研究　～観察研究編】

＜企画責任者＞　家　　研也（聖マリアンナ医科大学／川崎市立多摩病院）

座長・演者　家　　研也　（聖マリアンナ医科大学／川崎市立多摩病院）

演　　者　高田　俊彦　（福島県立医科大学白河総合診療アカデミー）

演　　者　廣瀬　雅宣　（聖マリアンナ医科大学）

演　　者　本橋　伊織　（聖マリアンナ医科大学／川崎市立多摩病院）

演　　者　櫛渕　　澪　（聖マリアンナ医科大学／川崎市立多摩病院）

＜企画概要＞

各種専門医資格の前提として学術活動が求められる昨今、世代によらず何らかの研究を意識する場面は多いと思います。 忙しい臨床の日々、「研究」に関心がない訳ではないけれど取り組むユトリがない、何から始めれば良いか解らない、そんな皆様へお届けするセッションです。 今回は観察研究をメインに、以下のテーマでお届けします。 学術活動　～捉え方とはじめの一歩～ 臨床医が研究をする意義や、取り組みやすい研究タイプについて リサーチクエスチョン(RQ)の立て方 RQ の立て方の基本、そもそもどうやって RQ を思いつけば良いのか データ集め、の前に知っておきたい注意点 ①データベース編 ②カルテレビュー編 若手の研究実例　～つまづきポイントと工夫～ 専攻医・大学院生の指導に実際に携わる指導医と専攻医のやりとりを通じて、専門研修中のはじめの一歩の踏み出し方のコツを共有する時間を設けます。 本セッションの受講を通じて、参加者の皆様の「やってみよう」を後押しできれば幸いです。 職種を問わず、臨床研究に関心のある全ての方を対象とします。

シンポジウム１７

日時：2022 年 6 月 11 日（土）16:30-18:00

【コロナ禍のプライマリ・ケアにおける多職種連携の実践

～多様な立場・環境を超えて見出した新たな連携の形～】

＜企画責任者＞　吉村　学　（宮崎大学 医学部 地域医療・総合診療医学講座）

座　　長　　吉村　　学　　（宮崎大学 医学部 地域医療・総合診療医学講座）

演　　者　　春田　淳志　　（慶応義塾大学 医学部 医学教育統轄センター）

演　　者　　後藤　智美　　（東京ほくと医療生活協同組合 生協浮間診療所）

演　　者　　星　　利佳　　（有限会社メディカ　ほし薬局）

演　　者　　中川　貴史　　（栄町ファミリークリニック）

＜企画概要＞

2020 年新型コロナ感染の世界規模の拡大により、当初、世界各国、我が国の地域によっても対応は混乱を極めた。 大都市圏や地方都市、人流が少ない地域まで行政、医療・介護、経済など生活へのダメージは計り知れないものであった。 本大会のテーマの中にあるさまざまな立場・環境を通じて、プライマリ・ケアに携わる我々が得たものまたは失ったものを実践から紡いで新たな多職種連携のあり方を見出すことを期待したい。 本シンポジウムではコロナ禍において医師、看護師、薬剤師からさまざまな立場・環境との連携・協働の模索・苦悩・実践を報告、また、我が国が直面したプライマリ・ケアに関する課題も含め、地域全体を俯瞰した視点で議論していく。

シンポジウム１８

日時：2022 年 6 月 12 日（日）8:15-9:45

【病院総合診療と家庭医療の共通基盤 ―調和と融合を目指して―】

＜企画責任者＞　多胡　雅毅（佐賀大学医学部附属病院 総合診療部）

座　　長	多胡　雅毅	（佐賀大学医学部附属病院 総合診療部）
座　　長	志水　太郎	（獨協医科大学　総合診療医学）
演　　者	中村　琢弥	（医療法人社団　弓削メディカルクリニック 滋賀家庭医療学センター）
演　　者	清田　実穂	（医療福祉生協連家庭医療学開発センター（CFMD）・ あおさ診療所）
パネリスト	佐々木陽典	（東邦大学医療センター大森病院 総合診療・急病センター）
パネリスト	鋪野　紀好	（千葉大学医学部附属病院 総合診療科）
パネリスト	家　　研也	（聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院 総合診療内科）
パネリスト	矢吹　　拓	（国立病院機構栃木医療センター）
パネリスト	和足　孝之	（島根大学医学部附属病院 総合診療医センター）
パネリスト	高橋　宏瑞	（順天堂大学医学部 総合診療科）

＜企画概要＞

総合診療領域のサブスペシャリティとして、日本病院総合診療医学会では病院総合診療専門医制度が、日本プライマリ・ケア連合学会では新家庭医療専門医制度が、これまで独自に整備されてきた。病院総合診療と家庭医療は総合診療を細分化するものと誤解されがちであるが、実際に両者の総合診療医としての基礎的な部分には共通点が多く存在する。2021 年には日本病院総合診療医学会と日本プライマリ・ケア連合学会の２学会による総合診療専門医取得後のキャリアに関する合同声明が公表され、この 2 つの領域の調和と融合を目指す動きは大きく前進している。本シンポジウムには、病院総合診療と家庭医療の双方の中堅指導医が登壇し、多様な視点を交え領域の垣根を越えて調和と融合を目指して議論を行う。セッション内では 2 つの専門医制度から共通基盤を見つけ議論を深め、総合診療を志す若手医師と学生に総合診療領域が目指すべき道を明示することを目的とする。

シンポジウム１９

日時：2022 年 6 月 12 日（日）8:15-9:45

【プライマリ・ケア医がスポーツ診療に関わる　～現状と可能性～】

＜企画責任者＞　濱井　彩乃（安房地域医療センター総合診療科）

座　長	小松　孝行	（順天堂大学医学部　スポーツ医学研究室）
座　長	松田　　諭	（ファミリークリニックさっぽろ山鼻）
演　者	松本　秀男	（日本スポーツ医学財団）
演　者	朴　　大昊	（ファミリークリニック加古川　院長）
演　者	伊東　知子	（マイファミリークリニック蒲郡/豊田地域医療センター）
演　者	濱井　彩乃	（安房地域医療センター総合診療科）
演　者	小嶋　　一	（手稲家庭医療センター）

＜企画概要＞

2020 年度、JPCA スポーツ運動医学委員会が設立。当委員会にて 2020 年 12 月 22 日～2021 年 1 月 17 日に JPCA 学会員を対象にオンラインでのアンケート調査を実施した。　調査の結果、スポーツ医学活動は、一部の会員は積極的に行っているものの多くの会員では行う内容に偏りがみられ、頻度も多くはなかった。一方でスポーツ医学活動に興味を持つ会員は多く、支援があれば活動したいという回答が多かった。しかしスポーツ医学について十分に学ぶことができていないという回答、多職種からも実際にどの程度のことができるのかわからないという意見もみられた。　このシンポジウムでは、アンケート調査の結果を踏まえ各シンポジストからみた様々な視点を共有し、フロアの参加者とともにプライマリ・ケア医がスポーツ診療に関わるための現状と可能性を議論したい。

シンポジウム２０

日時：2022 年 6 月 12 日（日）8:15-9:45

【診療所で看護師が機能を発揮したら住民の健康が、地域が、日本がどう変わる？】

＜企画責任者＞　森山美知子　（広島大学大学院医系科学研究科）

座　　長　　水川真理子　　（神戸市看護大学）

座　　長　　小幡　　篤　　（（公財）宮城厚生協会　坂総合病院内
みちのく総合診療医学センター）

演　　者　　矢尾知恵子　　（むさしの丘ファミリークリニック）

演　　者　　前田　弘子　　（宇都宮協立診療所）

演　　者　　山尾　美希　　（あさかぜ診療所）

演　　者　　渡部あずさ　　（北海道家庭医療学センター　本輪西ファミリークリニック）

演　　者　　岩間　秀幸　　（亀田ファミリークリニック館山）

＜企画概要＞

診療所の看護師は、チームの一員として、地域住民の健康に重要な役割を担っている。トリアージ、マイナーイルネス対応、健康診断、予防接種、慢性疾患管理、在宅療養支援もある。加えて、通院患者や家族に対する早期の気づきに基づく対応、医師や多職種とのつなぎ役・ファシリテーター役など、日常の動きの中に多くの専門性や卓越が隠されている。また、学会認定看護師や高度実践看護師が医師とタスクシェアを行い、また専門性の高い予防的な看護（患者教育やケアコーディネーションなど）を行ったら、重症化や入院がかなり防げ、地域全体の健康度が上がり、日本の医療費の適正化にも貢献できる可能性も大きい。患者や地域への効果が見えるほどに機能を発揮するには、診療所の看護師の位置や動き、建物の構造、支払い制度などをどのように変えていけばよいのだろうか。プライマリ・ケアの現場でチャレンジする看護師たちの話を聞いてみよう。

シンポジウム２１

日時：2022 年 6 月 12 日（日）10:00-11:30

【再考！ポリファーマシー　～真に効果的なアプローチとは～】

＜企画責任者＞　矢吹　拓（国立病院機構栃木医療センター）

座　　長　　宮原　　洋　　（ひおき調剤薬局）

座　　長　　春田　淳志　　（慶応義塾大学医学部　医学教育統轄センター）

演　　者　　青島　周一　　（中野病院）

演　　者　　矢吹　　拓　　（国立病院機構栃木医療センター）

演　　者　　家　　研也　　（聖マリアンナ医科大学・川崎市立多摩病院）

＜企画概要＞

ポリファーマシーは高齢社会において日常的に遭遇する頻度も高い重要なプロブレムのひとつである。最近ではポリファーマシーの概念も広く知られる様になり、様々な介入が行われているが、その介入効果の結果は一貫しておらず、真に効果的なアプローチが何かは明らかになっていない。一方で、介入の意味が全くないというわけではなく、効果的なポリファーマシー介入の要因を探る必要がある。　　本シンポジウムでは、①背景（コンテキスト）、②介入、③アウトカムの３要素についてのポリファーマシーのエビデンスを明示し、それらの違いがポリファーマシーの帰結にどのように関連するかを明らかにする。個別性や複雑性が高く、それぞれの患者の状況も異なるため画一的な介入が奏効しにくいという側面がある中で、真に効果的な介入対象・介入方法・アウトカムとは何かについて考える企画としたい。

シンポジウム２２

日時：2022 年 6 月 12 日（日）10:00-11:30

【地域医療の Choosing Wisely～プライマリ・ケアチームとして】

＜企画責任者＞　押切　康子（御代の台薬局品川二葉店）

座　　長　　坂口　眞弓　　（みどり薬局）

演　　者　　押切　康子　　（御代の台薬局品川二葉店）

演　　者　　宮田　俊男　　（医療法人社団 DEN みいクリニック　理事長　医師）

演　　者　　藤井　隆太　　（東京生薬協会会長：龍角散代表取締役）

演　　者　　太田　美紀　　（厚生労働省　医薬生活衛生局総務課　薬事企画官

（医薬・生活衛生局総務課医薬情報室長併任））

＜企画概要＞

地域医療において、薬剤師、薬局は地域住民にとって、本来は最も敷居の低い医療職であるべきではないかと考えられる。COVID-19 の流行により、国民には予防できる疾患に対して各自が出来るべき対応を取るべきであるということが認識されつつある。2021 年 6 月に日本総研から出された提言において、プライマリ・ケアを基盤とするチーム医療への移行が今度重要であるとされている。そのアンケートの中で国民皆保険制度の維持するにあたり相応の負担を納得のいく説明があれば応じていくという声が多くあった。プライマリ・ケアにおいて薬剤師は何が出来るのだろうか？薬局として、処方薬・衛生材料・OTC 医薬品や介護材料の供給を担うことは当然の事であろう。また、住民が必要とするときに何が必要であるかという医療知識、介護知識などを inform し、それを選択する為の支援を行う事も可能ではないだろうか。このようは点に関して考察を深めたい。

シンポジウム２３

日時：2022 年 6 月 12 日（日）12:30-14:00

【うつ病患者診療・徹底討論！：精神科医とプライマリ・ケア医の本音トークで共通理解と架け橋を作る】

＜企画責任者＞　佐田　竜一（天理よろづ相談所病院　総合診療教育部）

司　　会　　島田　志帆　（文部科学省高等教育局 医学教育課企画官）

司　　会　　市川　　衛　（一般社団法人メディカルジャーナリズム勉強会）

演　　者　　佐田　竜一　（天理よろづ相談所病院　総合診療教育部）

演　　者　　國松　淳和　（医療法人社団永生会 南多摩病院 総合内科・膠原病内科）

演　　者　　山田　　恒　（兵庫医科大学 精神科神経科学講座）

演　　者　　水原　祐起　（京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学／京都府立こども発達支援センター 精神科／特定非営利活動法人 SEED きょうと）

＜企画概要＞

日本でのうつ病の生涯有病率は 3～7%と高く、12 ヶ月有病率は 1～2%と報告されている、いわゆる common diseases の１つである。うつ病患者の多くはまずプライマリ・ケア医（以下、PC 医）を受診するため、PC 医がうつ病の診断、軽症患者の診療、及び重症患者の精神科連携を行うことが多い。しかし、PC 医の診療範囲や精神科との連携時期決定は、個々の診療能力や患者の希望、精神科紹介への物理的/心理的ハードルの高さなど複数の要因が絡むため、一定の方略で行うことが難しい。 本シンポジウムでは、市井の PC 医と、うつ病の診療ガイドライン普及に関わる精神科医が ① PC 医が診療するうつ病の診断と治療範囲 ② 精神科医が推奨するうつ病の診断と治療のあり方 ③ PC 医が精神科に紹介する際の、円滑な連携のあり方 について討論を行い、医療提供者、非医療者、行政の立場などから様々な意見を提示し、議論を深める。更に、当日の参加者からもアンサーパッドを用いたアンケートを行い、最終的に PC 医と精神科医の共通理解基盤を築くことが目的である。

シンポジウム２４

日時：2022 年 6 月 12 日（日）12:30-14:00

【てんかん患者の地域医療・移行期医療

～プライマリケア医だから出来ること～】

＜企画責任者＞　宮本　雄策（川崎市立多摩病院　小児科）

座長・演者　宮本　雄策　（川崎市立多摩病院　小児科）

座長・演者　岩崎　俊之　（聖マリアンナ医科大学　小児科）

演　　者　寺田　清人　（横浜みのる神経クリニック）

演　　者　原　恵子　（原クリニック）

＜企画概要＞

てんかんは全ての年齢に発症する慢性疾患であり、国内におよそ 100 万人の患者がいると推定されている。小児期に発症する患者の多くは成人までに発作を起こしにくくなり、抗てんかん薬を中止できる。しかし一部のものは成人期まで発作が残存し、薬物治療を継続する必要がある。また成人期にてんかんを発症し長期間にわたり薬物治療をうける人もいる。てんかんはとても多彩だが、その治療は発作を抑制することだけでなく、患者自身がてんかんという慢性疾患を持ちながら、その人らしく日常生活をおくり自己実現を達成することだと考えている。そのためには疾患についての知識だけではなく、患者の生活環境、家族背景、思想、将来の目標・夢などを十分考慮し、その人にあった対応をすることが重要である。小児期と成人では配慮すべきことが異なるし、運転免許取得や挙児希望の有無によっても対応は異なる。これらはプライマリケア医の得意分野であると考え、積極的なてんかん診療への参加を期待している。

シンポジウム２５

日時：2022 年 6 月 12 日（日）12:30-14:00

【研究指導：過去から未来へ】

＜企画責任者＞　松島　雅人（東京慈恵会医科大学）

座　　長	松島　雅人	（東京慈恵会医科大学）
演　　者	金子　　惇	（横浜市立大学）
演　　者	渡邉　隆将	（北足立生協診療所）
演　　者	一瀬　直日	（岡山協立病院　総合診療科）
演　　者	杉山　佳史	（東京慈恵会医科大学）
演　　者	太田　龍一	（雲南市立病院　地域ケア科）
演　　者	溝江　　篤	（藤田医科大学　豊田地域医療センター）

＜企画概要＞

プライマリ・ケア、総合診療を、より妥当にそしてより効率的に行うには、他分野からの研究結果をそのまま借りているだけでは不十分であることは言うまでもありません。プライマリ・ケア研究の重要性から、新家庭医療専門医認定においては研究実績が求められています。しかし、プライマリ・ケア現場からは、若手や専攻医に対して研究の指導がなかなかうまく行かないという声も聞かれます。そこで、研究指導をおこなってきた指導医から、その経験を語って頂くとともに、実際に研究を成就させた若手医師の経験も紹介し、今後、指導医が臨床研究を指導していくにあたってのヒントやTips を見つけられること、そしてこれから指導を受ける若手、専攻医の皆さんにとって先輩たちがどのように研究を成就させたかを知り、それを role model にできることを期待し、シンポジウムを企画しました。

シンポジウム２６

日時：2022 年 6 月 12 日（日）12:30-14:00

【診療看護師導入という未来の医療への提言

～さまざまな立場・環境をつなぐ～】

＜企画責任者＞　久保　徳彦（国立病院機構　別府医療センター　総合診療科）

座　　長　　久保　徳彦　（国立病院機構　別府医療センター　総合診療科）

座　　長　　志水　太郎　（独協医科大学病院　総合診療科）

演　　者　　忠　　雅之　（東京医療保健大学大学院）

演　　者　　後藤　智美　（東京ほくと医療生活協同組合　生協浮間診療所）

演　　者　　高橋　　淳　（リハラボ訪問看護リハビリテーション町田）

演　　者　　筑井菜々子　（公益社団法人　地域医療振興協会　JADECOM アカデミー NP・NDC 研修センター）

演　　者　　田平　絵里　（やまと在宅診療所　登米）

演　　者　　伊藤　健大　（長崎県上五島病院）

演　　者　　谷山　尚子　（社会医療法人　関愛会　大東よつば病院）

＜企画概要＞

2014 年に医療介護総合確保推進法が成立し、実践的な理解力や思考力及び判断力並びに高度かつ専門的な知識及び技能が特に必要とされる 38 行為を厚生労働省が特定行為と指定しました。大学院修士課程で病態生理学や薬理学を学び、幅広く複数の特定行為研修を受け、資格認定試験に合格すると診療看護師となります。 診療看護師はフィジカルアセスメント能力や特定行為を実施する技術を持ち、医師と連携することで様々な症状や疾患をもつ患者に対して医療を効率的に提供できます。 私共は、第 9 回・第 10 回本学会学術集会のシンポジウムで診療看護師の活動内容を伝え、第 11 回・第 12 回では診療看護師の導入に向けた戦略を議論し可能性を探ってきました。第 13 回ではさまざまな役割を持つ医療機関の診療看護師に今後の導入に向けてご講演をいただく予定です。 本シンポジウムにて議論した内容を参考に、各医療機関で診療看護師の導入を検討し、将来的な導入に繋がることを願っています。

シンポジウム２７

日時：2022 年 6 月 12 日（日）12:30-14:00

【事例の複雑さを多職種で紐解くカンファレンスをライブする　Day2】

＜企画責任者＞　春田　淳志（慶應義塾大学）

司　　会　　春田　淳志　（慶應義塾大学）

ファシリテーター　　後藤　亮平　（筑波大学）

＜企画概要＞

2 日続きのセッションである。Day1 は、多職種で複雑な事例を紐解くヒントを吟味し、課題の見立てや仮説を共有してきた。Day1 の総括を共有したところで、Day2 ではそれに続く具体的援助プランの提案を患者・家族に共有する実演してもらう。複雑な事例をいかに紐解き、そこから患者・家族が納得するプランをいかに構築できるかについて、明らかにしていく。この 2 日間のセッションを通じて、参加者は現場の専門職がいかに複雑な課題を紐解いていくのかの実演ライブを観戦し、参加者全員でそのエッセンスについてオンラインツールを使って言語化し、共有することで、明日からの協働実践に役立てる。

シンポジウム２８

日時：2022 年 6 月 12 日（日）14:15-15:45

【心不全パンデミック時代におけるプライマリ・ケアの役割

～心不全診療のアップデートとプライマリ・ケアの視点～

（U40 心不全ネットワークコラボレーション企画）】

＜企画責任者＞　官澤　洋平（明石医療センター総合内科）

座長・司会　官澤　洋平　（明石医療センター総合内科）

司　　会　齋藤　秀輝　（聖隷浜松病院 循環器科・心血管カテーテル治療科）

演　　者　佐藤　宏行　（東北大学大学院医学系研究科

先制循環器医療学寄附講座）

演　　者　大浦　　誠　（南砺市民病院内科・総合診療科）

演　　者　小野　雅敬　（関西医科大学　総合診療医学講座(地域医療学)）

＜企画概要＞

本邦は未曾有の心不全パンデミックの時代に突入しています。心不全患者を専門医だけで支えるのは困難な状況となってきており、医療職・地域が一丸となって向き合っていく必要があります。プライマリ・ケアももちろん重要な役割を担っていくと考えられます。しかし、心不全領域の進歩は他の領域以上に早く、知識を維持していくためには継続したアップデートが必要です。アンジオテンシン受容体・ネプリライシン阻害薬、HCN チャネル阻害薬、SGLT2 阻害薬など薬物治療だけでも話題がつきません。 今回、心不全診療の向上に熱心に取り組む若手心不全医たちで構成される U40 心不全ネットワークと協力しプライマリ・ケアが心不全診療の一役を担っていくために必要な知識のアップデートをお話いただきます。また、それだけではなく、プライマリ・ケアの視点だからこそ心不全診療の質を向上する可能性が見いだせないか、マルチモビディティへのアプローチを中心に総合診療医からの視点をお話します。 最後に、専門医・総合診療医からの話題をもとに、相互ディスカッションを行い、明日から専門医とプライマリ・ケアが連携することでどのように心不全診療のタスクシェアをできるか、心不全診療の質を改善できるかまとめます。

シンポジウム２９

日時：2022 年 6 月 12 日（日）14:15-15:45

【提言書発表シンポジウムーICT が可能にするプライマリ・ケアの未来ー】

＜企画責任者＞　吉田　伸　（飯塚病院・頴田病院）

司　　会　　吉田　　伸　　（飯塚病院・頴田病院）

演　　者　　小林　知貴　　（広島大学総合内科・総合診療科）

演　　者　　宋　　龍平　　（岡山精神科医療センター臨床研究部）

演　　者　　藤井孝太郎　　（サンキュードラッグマーケティング部）

演　　者　　武藤　真祐　　（医療法人鉄祐会　祐ホームクリニック）

＜企画概要＞

日本政府は科学技術の基本計画として Society5.0 を提唱し、IoT、ビッグデータ、AI、ロボット、モビリティ、仮想空間の活用により、知識や情報の格差や年齢や障害による人の能力の限界を克服し、社会参加や課題解決ができることを目指している。そして、プライマリ・ケアの領域でも従来の超高齢化や医療偏在といった課題に加え、今般の COVID-19 感染をきっかけにオンライン診療の拡大もなされ、外来・病棟・在宅に続く『第 4 の診療形態』としての役割が期待されている。　本学会は 2020 年度より ICT 診療委員会を設立し、オンライン診療やデータ・研究に関する活動も続けてきたが、今回は広く日本のプライマリ・ケアに沿った ICT の活用について、『ICT が可能にするプライマリ・ケアの未来』と題して提言書を発表する。これにあたり、提言書の趣旨を紹介するとともに、トピックとして、D to P with D の実践と実装研究について、オンライン服薬指導や薬局のデータヘルスについて委員よりお話しする。最後に識者により海外のデジタルメディシンや国内のシステム開発とデータ研究の統合の状況についてお話しいただき、クロストークを行うシンポジウムを企画した。　ぜひ提言書と明日のプライマリ・ケアについて闊達なご意見を頂きたい。

シンポジウム３０

日時：2022 年 6 月 12 日（日）14:15-15:45

【診断エラーに対して医師

-薬剤師は具体的に現場でどのような協働ができるか】

＜企画責任者＞　綿貫　聡　（東京都立多摩総合医療センター・総合診療センター）

座長・演者　綿貫　聡　（東京都立多摩総合医療センター・総合診療センター）

演　者　原田　拓　（昭和大学江東豊洲病院　総合診療科）

演　者　榎本　貴一　（練馬光が丘病院　薬剤室）

演　者　八田　重雄　（医療法人社団　家族の森　多摩ファミリークリニック）

＜企画概要＞

従来「診断は医師が単独で行うもの」とされてきたが、 現在では医師以外の職種が持つ重要な情報を医師に伝え、 医師はその内容の診療への反映を検討することが、 診断エラーを防ぐために重要である。 医師-薬剤師間の協働で分かりやすい事例としては、医師が見逃していた 薬剤有害事象を薬剤師が同定し、医師に言及する場面などが挙げられるが、 職種によるヒエラルキーの問題などの障壁があり、一筋縄には行かないのが現状である。 本セッションでは、日本の臨床現場での課題と、実現可能な対策を紹介する。 具体的には、「診断エラーの観点から、医師-薬剤師間での協働において薬剤師が達成可能な内容」、「薬剤関連の副反応事例の臨床経過・診断パターンの紹介」、「病院薬剤師・診療所/病院外薬剤師の立場から診断エラーの解決に関与した事例の紹介」、「診断エラーに気がついたときの薬剤師の具体的なアクションや医師への報告の際の障壁」などの内容を取り上げる。

シンポジウム３１

日時：2022 年 6 月 12 日（日）14:15-15:45

【グローバルヘルスの最新トピックとプライマリケア】

＜企画責任者＞　長嶺由衣子（東京医科歯科大学大学院東京都地域医療政策学講座）

座　　長　　長嶺由衣子　　（東京医科歯科大学大学院東京都地域医療政策学講座）

演　　者　　坂元　晴香　　（東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座）

演　　者　　堀内　清華　　（山梨大学大学院総合研究部附属出生コホート研究センター）

演　　者　　西村　久明　　（東京医科歯科大学国際健康推進医学）

＜企画概要＞

本シンポジウムでは、グローバルヘルスの実践、研究の領域で活躍する３人の登壇者とともに、SDGs をはじめとするグローバルヘルスの最新トピックを整理し、日本のプライマリケア従事者としてどのような知識を持っておくべきか、またどのような貢献が可能かを議論する。併せて、気候変動と健康の関連、小児領域のグローバルヘルスの最新トピックについても取り上げる。

シンポジウム３２

日時：2022 年 6 月 12 日（日）14:15-15:45

【プライマリ・ケア医と人類学者のコラボによって生まれた／るもの

−可能性と課題−】

＜企画責任者＞　飯田　淳子（川崎医療福祉大学）

座長・演者　　飯田　淳子　（川崎医療福祉大学）

演　　者　　春田　淳志　（慶應義塾大学医学部医学教育統轄センター）

演　　者　　井上　和興　（大山町国民健康保険大山診療所/
鳥取大学医学部地域医療学講座）

演　　者　　森下真理子　（京都保健会仁和診療所/京都大学医学教育・
国際化推進センター）

演　　者　　奥　　知久　（奥内科・循環器科）

演　　者　　宮地純一郎　（北海道家庭医療学センター 浅井東診療所/
名古屋大学大学院 医学系研究科総合医学教育学博士後期課程）

ディスカッサント　島薗　洋介　（大阪大学グローバルイニシアティブ機構）

ディスカッサント　錦織　　宏（名古屋大学大学院 医学系研究科総合医学教育センター）

＜企画概要＞

文化人類学・医療人類学（以下、「人類学」）と家庭医療・総合診療との接点や親和性が指摘されることは少なくない。双方ともに人間を生物であると同時に文化的・社会的存在として捉えることを重視しており、欧米の家庭医療学のテキストには、人類学を基盤となる学問分野の 1 つとして位置づけているものもある。本シンポジウムでは、人類学者と教育・研究・臨床上の協働をおこなってきたプライマリ・ケア医が、これまでの活動を振り返り、協働によって何が生まれたか、医療者だけとの活動とどう違うか、今後の課題などを整理する。また、これらの協働に関わってきた人類学者と医学教育学の専門家が、それぞれの立場からコメントを行う。人類学は「～についての（of）」研究ではなく、「～とともに（with）」変容するプロセスであるともいわれる。医療者と人類学者との協働を通じた学びを広い意味での教育ととらえ、今後の可能性と課題を参加者とともに考える。